

## 2017 年冬学期講義、金 3、現代哲学講義、認識論「物語形式の知の分析」

<シラバス>

**講義内容：**私たちの知は、理論の形式をとるか、物語形式をとるかである。自然科学や社会科学は、理論形式の知である。しかし、私たちの日常生活や社会や歴史を構成している知の多くは、物語形式の知である。ここでは、私たちの生活や社会や歴史を理解するために、物語形式の知について分析する。

**目標：**物語形式の知の特徴を理論形式の知との比較において、説明できるようになること。

物語的説明、物語的問、物語的推論の特徴を説明できるようになること。

### Course Outline:

- 1 導入  
物語研究の歴史
- 2 物語の語彙と構造  
基本行為と物語の基本構造
- 3 物語文の分析  
物語文における指示と時間
- 4 物語的問  
物語的問いは何を構成するのか  
理論的問い、実践的問い、物語的問い
- 5 物語的推論  
理論的推論と物語的推論  
実践的推論と物語的推論
- 6 物語世界  
理論的世界と物語的世界
- 7 物語的共有知と問答  
物語的共有知と実践的共有知
- 8 物語的主体と問答  
自我の物語的自己同一と歴史

凡そこのようなトピックを取りあげますが、話の順序は準備の都合上、変更します。

### 第1回 (20171208)

#### § 1 非常に短い序論

アーサー・ダントは、『物語としての歴史』において、「**歴史的存在の記述的形而上学**」(同訳 p. 6)の構築を目指すと語っている。「**記述的形而上学**」とは、ストローソン (Strawson) が『**個体**』 (*Individuals*) 1959 で主張したものである。同書の「序論」で、「**記述的形而上学**」 (descriptive metaphysics) と「**修正的形而上学**」 (revisionary metaphysics) を区別して次のように言う。

“descriptive metaphysics is content to describe the actual structure of our thought about the world, revisionary metaphysics is concerned to produce a better structure.”

ストローソンは記述的形而上学の立場をとるが、それは存在論が言語に相対的であることを認めるだろう。

これは、クワインの存在論的相対性の主張につながるものである。クワインは、観察と一致する理論は複数可能であり、それらからどれを選択するかは、プラグマティックな関心に依存すると主張した。どうようんことを、歴史学についても言えるはずである。

ダントが意図するのは、歴史についての語る語り方から、歴史的存在(?)についての存在論を構築することである。この講義で参照するもう一人の哲学者ヘイドン・ホワイトの『メタヒストリー』もまた歴史の言語的相対性を指摘する。現代の歴史哲学は、おそらく言語的相対性を認めざるを得ないだろう。

クワインは、「経験論の二つのドグマ」1951の結論の一つである意味の全体論に基づいて、科学理論とギリシア神話は、ある意味で原理的には、区別できない、と述べていた。それは最終的に正しいかもしれないが、しかしとりあえずこの二つの間には、大きな違いがある。その違いの一つは、理論形式と物語形式の違いである。私たちの知は、論理学、数学、自然科学に典型的にみられる理論形式と、歴史、国家、民族、集団、個人、自分、事件、行為、などを語る時の物語形式に分けられるように思われる。

この二つの知の形式、とくに後者の物語的形式がどのようなものなのか、この二つの形式はどう異なるのか、知や信念はなぜこの二つの形式に分かれるのか、を言語的分析によって、とくに問答関係に注目することによって、考察することが、この講義の目標です。

注：物語形式をとるものには、フィクションとノンフィクションの区別があると思われています。アニメ「この世界の片隅で」は、どちらなのでしょう。それが仮に実話に基づいていないとしても、当時の社会はおおむねあのようであったのだと私たちが理解するならば、それはおおむね真理であるということになります。アニメ「君の名は」は、明確にフィクションですが、しかしそこには東京や地方の「リアル」な風景が描かれているかぎりで、その点でそれは真理であるということになります。さらにいえば「サザエさん」や「クレヨンしんちゃん」もある意味で、真理が描かれています。このように考える時、フィクションとノンフィクションの線引きはできるのでしょうか。ノンフィクションもまた、知の形式としての物語形式に含めて考えられるかもしれません。

## §2 物語文

参照：Artur C. Danto, *Narration and Knowledge, including the integral text of Analytical Philosophy of History*, 1985 ダント『物語としての歴史』河本英夫訳、国文社、(以下は同訳からの引用ページ数)

まず、物語に特徴的な「物語文」というものを、ダントの『物語としての歴史』の「第8章 物語文」をもとに、明らかにする。

### # 「物語文」の定義

彼は、「物語文」を次のように定義する。

「それらが時間的に離れた少なくとも二つの出来事を指示するということである。その際指示された出来事のうちの、より初期ものだけを(そしてそれについてのみ)記述するのである。通常それらは過去時制をとる」174

「物語文は、少なくとも二つの時間的に離れた出来事を指示し、そのうちの初期の出来事を記述する。」194

### # 「理想的編年史」の定義

ダントは、私たちの「未来」と「過去」についての理解を次のように説明する。

「未来が生き生きとして、可変的で、そして決定可能であるのに対し、私たちの過去についての観念は、完全に決定され固定され、既成事実となり死んだものについての観念にほからない。」(パースからの引用) 174f

「「過去」とは、これまでに起こったすべての出来事が、起こった順に定置されているような巨大な容器か格納庫のようなものと想定してみよう。」178

このような容器としての過去を記述するのが、理想的編年史である。

## 「理想的編年史」

「理想的編年史家」 「彼はたとえ他人の心の中であれ、起こったことすべてを、起こった瞬間に察知する。彼はまた瞬間的な筆写の能力も備えている。「過去」の最前線で起こることすべてが、それが起こったときに、起こったように、彼によって書き留められるのである。その結果生ずる生起しつつある叙述を、私は「理想的編年史」 (Ideal Chronicle) となづけることにしよう。」 181

### #理想的編年史には物語文が登場しない。

しかし、このような理想的編年史があっても、歴史家の仕事はなくなるとダントはいう。その理由は、理想的編年史では不十分であるということにある。

「[理想的編年史は] 起こったときに、起こった通りに目撃できるような理想的な証人が記述するという意味において完全なのである。だが、これだけでは十分ではない。なぜならばいかなる出来事についても、そこでその出来事が目撃されているのではないような一連の記述があるのであり、こうした記述は必然的に、しかも原則的に理想的編年史から除外されているからである。一つの出来事についての真実全体は、後になってから、時にはその出来事が起こってからずっと後にしかわからないし、物語の中のこの部分は、歴史のみが語りうるのである。それはちょうど、最良の証人すらも知りえないような事柄である。私たちがわざと、理想的な編年史家に持たせずにおいたのは、この未来についての知識であった」 184

例えば、

「未来に言及することもせず、起こったことを、起こったときに、起こったように述べることを超えてさらに進むのでなければ、理想的な目撃者が、1618年に「三十年戦争が今始まった」と記すことは不可能であろう。それが三十年続くのでそう呼ばれているからである」 185

「私がかかわっている種類の記述は、二つの別個の時間的に離れた出来事、E1およびE2を指示する。そして指示されたうち、より初期の出来事を記述する。」 185

「「30年戦争は、1618年に始まった」は、戦争の開始と終わりとを指示しているが、戦争の開始のみを記述している。」 185

「1648年以前に「三十年戦争」と記述できるものは、おそらく誰もいないだろう」 185

「理想的編年史は、物語文を用いることはできない。「理想的編年史にははじめもなければおわりもない」 186

ある出来事が起こった後に、それを原因として別の出来事が起こる時、最初の出来事は別の意味を持つことになる。その意味について語るには、その後起きる出来事に言及する必要がある。ある出来事が原因となって生じる未来の出来事について、理想的編年史は記述できない。

### #物語文に登場する述語と指示、あるいは、理想的編年史にあらわれない述語と指示

次の例のように「先取りする」という述語を用いた文は、物語文となる。

「アリストアルコスは、コペルニクスの地動説を先取りしていた」

同様に、「…は…の原因となった」「正しく予言した」「先導した」「始めた」「先んじた」「もとになった」なども物語文をつくる。これらの述語は、「出来事に対して真であるためには、E1より時間的におそい出来事を論理的に必要とし、これの名辞を用いた文は明らかに物語文となるのである」 192

また次のような指示表現の使用も、物語文をつくる。

「『プリンキピア』を書いた人」(192)

「ニュートンは、1685年から1687年まで『プリンキピア』を書いた。それ以前に、ニュートンを「『プリンキピア』を書いた人」として指示することは不自然である。」 192

「・・・ の場所」「…の人」の「…」のブランクに「その個物が存するときよりも、時間的にのちに起こるような出来事、人物、場所を指し示すような出来事を指示する表現によってうめられる」192

たとえば、1945年以前に、広島を「最初に原爆が落とされた都市」として指示することは不自然である。「Aさんは、1948年に、原爆が落とされることになる都市で働いていた」は物語文である。

### <ミニレポート課題>

このような述語と指示表現を用いて、物語文の例文を、それぞれ一つ、つくってください。

### # 物語文による過去の変化

物語文が過去の出来事を記述することによって、過去の出来事は、新しい性質をもつ。

「 $t_1$  時の出来事  $E_1$  は、 $t_2$  時の出来事  $E_2$  の必要条件であると仮定しよう。このとき直ちに  $E_2$  は  $E_1$  の十分条件となる。ある出来事の十分条件は、このように出来事より遅れて起こることになる。そして原因が結果のあとに引き続いて起こると言うのでなければ、原因の概念と、必要および十分条件の概念とをすぐに同化させることはできない。したがって  $E_2$  が  $E_1$  を生じさせたと考えるのは困難である。」

「しかし最低限、 $E_2$  は  $E_1$  についての記述を可能にし、そこでは  $E_1$  はそれまで目撃されようもなかったような記述を受けるのであり、それゆえこの記述は、理想的編年史にはあらわれていなかったものなのである。」189

{この個所の前半部分は、おかしくないだろうか。  $E_1$  が原因、 $E_2$  が結果の関係にあるとしよう。このとき、 $E_1$  は  $E_2$  の必要条件であり、 $E_2$  は  $E_1$  の十分条件である。 $E_2 \supset E_1$  のとき、 $E_1$  は  $E_2$  の必要条件であり、 $E_2$  は、 $E_1$  の十分条件である。この対偶は  $\neg E_1 \supset \neg E_2$  である。これは、おかしいだろうか。なぜなら、結果の  $E_2$  が生じているときに、常に  $E_1$  が生じるとは限らないからである。}

### # 行為を記述するすべての文が、物語文であるのではない

#### ・行為を記述する文の構造

「物語文は、少なくとも二つの時間的に離れた出来事を指示し、そのうちの初期の出来事を記述する。しかしこの構造はまた、ある意味で通常行為を記述するのに用いられるすべての文に現れている。」

194

行為を記述する全ての文は、「少なくとも二つの時間的に離れた出来事を指示し、そのうちの初期の出来事を記述する」という構造をもつ。なぜだろうか。

彼は、「R しつつある」のような述語を「企画動詞(project verb)」195 と名付ける。たとえば、「ばらを植えている」や、「ラジオを修理している」である。

「「バラを植える」という表現に含まれる行動の範囲には、掘り、施肥し、種まきをし、そしてシャベルや種を買うことや、品種のカタログを読んだり専門の庭師をやとうことまでふくまれている。」

このように、「R しつつある」は一般に、多くの部分  $B_1 \cdots B_2$  から構成されている。

「 $a$  が  $t_1$  時に  $B_i$  を行い、私たちは彼の行為を、「 $a$  は R しつつある」という特定の企画動詞を用いて記述すると仮定する。このことは彼の行動を、未来に照らして、すなわち R の生起に照らして記述することにならないだろうか。そしてこのとき、その文は  $t_1$  時の  $B_i$  と  $t_2$  時の R という時間的に離れた二つの出来事を指示してはいないだろうか。こうだとすると企画動詞を用いたすべての文は、すでに示したように物語文として特徴づけられるように思える。」196

犬小屋をつくるために、鋸で板を引いているときに、「何をしているの」と問われて「犬小屋をつくるために、板を鋸で引いています」と答えたでしょう。このとき、板と完成したときの犬小屋を指示して、板について記述している。

しかし、もしここで、「(この板で) 犬小屋をつくっています」と答えたとしたらどうなるだろうか。この文もまた、板と完成した犬小屋を指示しているが、犬小屋を記述していることにならないだろうか。

ダントならば、次のように答えるだろう。板を鋸で引く作業を目にとめて、「何をしているのか」と問われて、「犬小屋をつくっています」と答える時、「犬小屋をつくっている」は、現在の作業についての記述なのである。

どうようなことが、次についても言える。「なにをしているの」と問われて「バラを植えています」と答えたときに、苗を植えるための穴を掘っているのだでしょう。ここでは、「苗を植える行為」を指示して、それについて、「バラを植えている」と記述しているのである。

行為を記述する文(企画動詞を用いた文)は、すべて物語文なのだろうか。理想的編年史には、人間の行為を記述する文がなくなる。

「企画動詞が使えなければ、理想的編年史は、人間のしていることを記述できなくなる。その結果理想的編年史は、起こることをすべてを、起こるときに、起こるとおりに書き留めるということが不可能となる。」 197

ここで、ダントは、行為を記述する文(企画動詞を用いた文)を二つに分ける。

「ジョーンズはバラを植えている」

これは、バラが生えなくても、真となりうる。

「ジョーンズは、賞を取るバラをうえていた」 200

これは、バラが生えなければ真とならないし、賞を取らなければ真とならない。前者は予言ではないか、後者は予言である。

「「Rしつつある」が任意の企画動詞であるとして、Rがおこならなくてもよいという場合がありうる。」

「ある人について企画動詞を用いて主張した文が、時間的に離れた二つの出来事——その人が字義通りに行っているBi および予想される結果 R——を指示詞、さらに後の出来事に照らして前の出来事を記述するにも関わらず、文が真となるために、後の出来事が起こるということは、論理的には必要とされない。それゆえaはRしつつあると私たちが正しく述べる時、そこでなされた未来への指示は、その文の真理条件の一部とはならない。」 199

前者の文は、その後の出来事の影響を受けないので、理想的編年史に登場しうる。後者は、その後の出来事の影響を受けるので、理想的編年史には登場しえない。ダントは、後者だけを物語文であると考えた。

## <ミニレポート課題2>

このような二種類の行為を記述する文の例を、それぞれ一つ挙げてください。